

平成25年度  
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI  
(研究成果の社会還元・普及事業)  
実施報告書

HT25165

【プログラム名】「私たちの隣で暮らす東アジアからの若者とホンネで語ろう」



開催日：2013年10月19～20日

実施機関：立命館大学BKCキャンパス  
(実施場所) エポック立命21

実施代表者：金丸裕一  
(所属・職名) (経済学部・教授)

受講生：中学生2名、高校生13名(保護者1名)、  
他大学教員1名

関連URL：<http://www.jsps.go.jp/hirameki/ht25000/HT25165.pdf>

### 【実施内容】

#### 1. 留意した点・工夫した点

本プログラムは、立命館大学BKCキャンパス・エポック立命21を会場として、近隣の中高生を招き、一泊二日の合宿形式で本学に在学する中国・韓国・台湾の留学生との交流を通じて、日本とこれら隣国に住む双方の若者が歴史認識を含めて相互理解を深めることを目的に実施した。

まず実施分担者では、金丸裕一先生「歴史の和解」、石川亮太先生「韓国の近代」、高屋和子先生「現代の中国」が、それぞれ爾来の研究テーマを参加生徒に伝える上で、本プログラムの主旨と東アジアの現状問題を絡めて、①「メディア報道」から感受したイメージと、②留学生によって伝えられる実際の「隣国理解」、この両者に介在する「ズレ」に視点を置いて、計画・準備した。そこで活動を活発にするために、上記の視点をふまえて、受講対象を近隣の中高生と留学生に設定し、これによって意欲のある「若者」と、報道では見えない彼らの「ホンネ」に語らせることが本プログラムの目的を最大限に達成するための留意と工夫であった。

#### 2. 当日のスケジュール ※尚当初の予定と若干の変更がある。

##### ○10月19日(一日目)

- 13:00～開講式・自己紹介
- 13:50～高屋和子先生ミニ講義「現代の中国」
- 15:00～中国に関して留学生とグループ議論
- 16:00～図書館見学・オリエンテーション
- 18:00～夕食
- 19:00～石川先生ミニ講義「韓国の近現代」
- 20:00～韓国に関して留学生とグループ議論
- 21:00～意見交換・振り返り

##### ○10月20日(二日目)

- 7:30～朝食
- 9:00～日中韓台の歴史をふまえた交流議論
- 10:15～まとめ・金丸先生「歴史の和解」
- 11:00～感想文記入、未来博士号授与

#### 3. 活動の様子

各担当先生のミニ講義では、ビデオ視聴を含めて、先生方から「答えの無い」現実世界で、隣国理解を如何に達成するかが、熱心に講義された。



### 3. 活動の様子(続き)

本プログラムでは各先生のミニ講義以外に、意欲ある参加生徒と本学留学生とのグループ討論が主であったが、このグループ討論では双方が積極的に質問しあったり、議論する中で報道と実際の「ズレ」を知ることができた。



### 4. 事務局との協力体制

近隣の高校へ直接訪問・チラシ作成・送付、参加者への各種案内、宿泊施設の手続き、当日対応、経費官営を事務局にて対応し、教員がプログラムに集中して取り組むことができた。

### 5. 広報活動

高校への直接訪問、近郊(滋賀県・京都市・宇治市)の中学・高校を中心にチラシを送付、大学HPでの告知を実施した。また、関係者伝いに社会・国語学科担当の中学・高校の教員へ紹介し、修学旅行で海外(アジア圏)へ行く学校をリサーチ・案内を行った。

### 6. 安全体制

座学・ディスカッションが続くため、十分な休憩時間を設定・確保、緊急事態の対応方法の確認に努めた。また、宿泊が伴うプログラムのため、参加者の学年等も踏まえて部屋割りを実施し、実施協力者も同部屋に宿泊をする等、円滑かつ安全な体制に努めた。

### 7. 今後の発展性・課題

参加生徒及び留学生からは、「これからもやって欲しい」「毎年恒例にしてほしい」といった声が数多く聞かれた。国籍は違えど、このプログラムで体得した新たな理解を、今後は自分達が発信していくべき自覚が芽生えたことに参加者一同大きな達成感を感じている。参加生徒達の感想のように、このような「若者」を中心とした「国境を越えた」プログラムが、彼らの心の中で「恒常的」に発展し、また彼らを起点としてこのような輪が更に拡大していく可能性を大いに秘めている点は、最大の収穫であろう。いっぽうで、今回は比較的小規模での実施であったが、今後再度実施する場合には如何にして規模が拡大できるのかという課題も見えた。また、修学旅行で台湾に行くので、その事前学習のためということで参加してくれた学校もあり、修学旅行先のリサーチ先の強化など、広報方法の拡大も検討する必要があると思われる。これらの発展と課題両成果を身に染みて感じつつ報告書の結語としたい。



#### 【実施分担者】

高屋和子 経済学部・准教授  
石川亮太 経営学部・准教授

【実施協力者】           17名          

#### 【事務担当者】

早野 純矢 研究部 リサーチオフィス(BKC)